

# 日中の酒にまつわる論争について

## —「酒飯論」を中心に—

三瓶 はるみ

### はじめに

中国敦煌より出土した文学作品の中に、「茶酒論」と称する故事賦（物語を主体とし、韻文と散文を交えた作品）がある。茶と酒による論争を水が仲裁するという内容で、唐代後半頃までに成立したと思われる。一対一の論難というスタイルは、明代に成立した「梅雪争奇」「花鳥争奇」など、一連の「争奇もの」と呼ばれる論争形式の作品に影響を与えたとされている。一方日本には、室町時代後期に成立した「酒茶論」と題する作品が存在する。タイトルと内容の類似性から、敦煌本「茶酒論」の影響が論議されているが、裏づけとなる資料に乏しく、因果関係は明らかでない<sup>1</sup>。また、中国における「茶酒論」同様、日本でも「酒茶論」と類似の作品が存在する。中でも、室町時代の成立と思われる「酒飯論」（『群書類従』には「酒食論」として収録）という作品は、土佐派の絵師の筆とされる絵巻に詞が付されたもので、上戸（酒好き）と下戸（飯好き）の論争を中戸（酒も飯もほどほどに嗜む）が仲裁するという内容である。青木正児氏は『抱樽酒話』の中で、「酒飯論」は『酒茶論』に暗示を得て別に新機軸を打ち出したものであり、『酒茶論』は……唐土に『茶酒論』と題する手本が有って其の直系に属し、此の方は其れと少し趣を異にして傍系的性格を示しているからである」と述べている。両者はもとより体裁（「酒茶論」は漢文、「酒飯論」は和文）や製作意図を異にしており、「茶酒論」と「酒茶論」の関係性が明らかでないように、「酒茶論」と「酒飯論」も分けて考えるべきではなからうか。

### 一、中国の「茶酒論」と日本の「酒茶論」

そもそも、「茶酒論」、「酒茶論」とは、どのような性格の文学作品であるのか。

「茶酒論」は敦煌より出土した、物語を主体とした賦体の作品である。写本には「郷貢進士王敷撰」と作者名が記されており、その肩書きから王敷は経学と詩文に通暁した人物であることがわかる。「郷貢進士」とは、地方における激しい官吏登用予備試験をパスした「科挙試験受験資格取得者」、つまり官吏予備軍の

一人であることを意味する。製作年代は明らかではないが、写本の一つ、ペリオ本P2718の尾題に「開宝三年壬申之歳」の記述のあることから、北宋の初め（970年頃）に書写されたことが判明している。字数千三百字ほどの、四言を主とし隔句末に押韻する歯切れの良い文体で、茶と酒による一対一の問答が9回（茶が5回、酒が4回）繰り返される。茶を仏教と、酒を「礼」と関連付け、経書・史書・諸子百家の書・詩文などからさまざまな典故を引いて、茶と酒が身分の貴賤を競い合う。論争が激した挙句相手への個人攻撃となり、酒の害・茶の害を唱えて両者相譲らぬところへ水が参入し、双方を仲直りさせる。茶・酒・水にまつわる故事ばかりでなく、茶と酒の産地と名産品が列挙されていることで、物語を追ううちに茶と酒に関するちょっとした知識を得ることができる仕組みになっている。韻文であること、一対一の問答形式であることなどから、当時行われていた伎芸や三教論議（儒仏道三教による論争）との関連性も指摘されている<sup>2</sup>。

一方、日本の「酒茶論」は室町時代後期に成立した。作者は美濃の国（現在の岐阜県）鏡島乙津寺第二世住職であった僧・蘭叔である<sup>3</sup>。現存する自筆本の巻末に「天正四載丙子」の記述のあるところから、1576年頃の創作と思われる。蘭叔は漢学の教養の深い僧であったと見え、自筆本は漢文の散文体で書かれている。酒の愛好者（忘憂君）と茶の愛好者（滌煩子）がそれぞれ古典籍を引用し、風流韻事を述べつつ己の高潔さを競うもので、「茶酒論」と同様、茶が7回、酒が6回問答を繰り返し、最後に「一閑人」が登場して両者を仲裁するという体裁である。僧侶の創作であるためか、「酒茶論」では茶も酒も仏教と関連付けられ、仏典や詩文に見える故事典籍の引用に多くの字数を割いている。「酒茶論」の大きな特徴は、茶と酒の論争のほとんどすべてが中国の古典籍からの引用であり、本朝の事例については、最後に滌煩子が挙げる梅尾と宇治の茶の来歴のみである。また、「茶酒論」では茶が飲酒の害を強調し、酒を飲めば悪さをし、失態を演じて罰を受けるのが落ちだから、仏様におすがりして禁酒しろと迫る。「酒茶論」でも「酒の三十六失」を

称し、釈尊が禁じているとしているが、菩薩や僧侶の飲酒にまつわる故事もまた列挙されているのである。高位の僧侶である蘭叔が、酒の害を厳しく問わなかったのはなぜだろうか。江戸初期に編まれた『醒睡笑』という笑話集には、蘭叔と酒にまつわる次のような話を載せている。ある日、酒盛りの席で蘭叔は正雲という僧に酒を勧めた。正雲が飲酒は仏戒であるからと断ると、蘭叔は、お前は飯をも断つのか、「酒戒」があるなら「飯戒」もあるぞとだじゃれで応じた、と<sup>4</sup>。蘭叔が本当に酒を飲んだのか、あるいは「酒茶論」の作者ゆえに作られた話であろうか。飲酒を仏戒とする「茶酒論」とは異なり、「酒茶論」は飲酒に対して比較的寛大であるといえよう。

## 二、酒呑みと飯好きの争い―「酒飯論」

では、「酒飯論」では酒はどう描かれているのだろうか。

「酒飯論」には、絵巻に詞書が付されているもの（模写本）と、『群書類聚』に収録されているものがあるが、多少の文字の異同はあるものの内容はほとんど変わらず、上戸と下戸と中戸による弁論の体を成している。塙保己一撰『群書類従』では飲食部五に「酒食論」として収録、本文の末尾に「右酒食論八何人ノ作カヲ知ラザル也、或ハ後成恩寺禪閣之戯作ト曰フ。余読ム之鄙言俚語、復タ取ル可キ無シト雖モ、時世之変替観ルニ足ル有ルハ、亦鶏肋ニ係ル故ニ遂ニ収録ス云」と記している。「後成恩寺」は一条兼良（1402～1481）の号であり、ほぼ室町時代の中頃ということになる。『室町時代物語大成』の解題によれば、「酒飯論」絵巻は国会図書館、東京国立博物館ほかに、江戸時代の書写がいくつか伝存するという<sup>5</sup>。国会図書館所蔵本は土佐光元筆、猪苗代兼載の詞書を模写したものと伝える。土佐光元（1530?～1569）は土佐派十三世の絵師であり、猪苗代兼載（1452～1510）は宗祇と親交のあった連歌師である。また、金沢市近世史料館所蔵の「酒飯記」絵巻は、土佐光信の絵を模写したものと伝える。土佐光信は室町中期に活躍した土佐派十一世であり、1496年に足利幕府の絵師職に就いている。光元はその孫であった。諸説を合わせると、絵巻が描かれたのは蘭叔自筆本「酒茶論」の成立（天正四年、1576年）より若干早い年代ということになるが、「酒飯論」本文の成立年代についてはよくわからない。絵巻には武士や僧侶の食事風景や、台所の調理の様子などが描かれており、当時の風俗を知る上で貴重な資料となっている。本文の構成は、序と三者（上戸・下戸・中戸）の主張という四つの部分から成り、三者が意見

を述べる機会は一度だけである。「酒茶論」や「茶酒論」で言い争いがクレッシェンド（二者による一対一の論争が繰り返され、その主張がさまざまに発展）してゆくと、体裁を異にする。また「酒飯論」では、飲酒による失態や醜態がクローズアップされ、その描写に大きく紙幅を割いている。各々の叙述の後にお題目と和歌一首が付され、それぞれ浄土宗、法華宗、天台宗を暗示していることも、「酒茶論」には見られないスタイルである。

## 三、「酒飯論」の内容

前述のように、「酒飯論」は四つの段落に分けられる。ここでは、段落を追いながら内容を検討する。

第一段は短い序の形式で、天下泰平の御世を寿ぐことばから始まる。作者はこの時代を遠い過去の「漢家の明王聖主」とは比べられないが、「延喜天曆もこれにはいかが」と思われるほどの治世であることを褒め称え、登場人物を紹介する。「酒茶論」では登場人物の名前が酒と茶の異名（忘憂君、滌煩子）であったのに対し、こちらは純日本風の命名で、造酒正糟屋朝臣長持（上戸）、僧侶・飯室律師好飯（下戸）、中左衛門大夫中原仲成（中戸）。以下、この三人による論争が展開されることがまず示される。

第二段は上戸の造酒正長持の弁である。その主張の中心は、飲酒の楽しみである。漢詩における風流な飲酒や宴席の酒、本朝の物語に登場する酒にまつわる話、酒の余興の数々、四季折々の酒の楽しみを並べ、人生を享受することを述べる。最初に漢詩を挙げ、中国における飲酒の風流をうたう。引用されるのは李白の「瓊筵を開いて以て花に座し、羽觴を飛ばして月に酔う」、白居易の「林間に酒を煖めて紅葉を焼く」<sup>6</sup>であるが、この二句は「酒茶論」でも「四時に宜しきは酒也」として、春と秋の代表に挙げられている。日本の宴席では、元服や詩歌の会、結婚式、勝負の席、中国の例では春の曲水の宴と秋の重陽の節句を挙げ、盃が無ければこうした雅な遊びはできないと指摘する<sup>7</sup>。盃に関連して、『大鏡』に収録される紫式部の和歌（後一条天皇誕生を寿ぐうた<sup>8</sup>）が提示され、源氏物語、狭衣物語、伊勢物語の中の酒にまつわる話<sup>9</sup>がそれに続く。酒宴の余興には管弦乱舞、白拍子、立ち舞い、居舞い、東舞い、今様、神楽、催馬楽などのほかに、「物まね、声わざ、力わざ」と言った芸能も登場し、当時の酒席ではさまざまな伎芸が行われていたことをうかがわせる。長持はまた、「酒は憂いを消す」、「酒に酔った上での失敗は許される（たとひ失錯したれども、酒に酔ひとぞ許されぬ）」と述べる。「酒は憂いを

消す」とは、「茶酒論」にも「酒是消愁藥」とあり、「酒茶論」で酒を「忘憂君」と称しているのと同じ典故によるものであろう<sup>10</sup>。興味深いことは、酒飲みは金持ちである、としていることである。いわく、「好みて酒を飲む人は、昔は封戸も ましましき」「生まれつきたる貧福は、下戸のたてたる蔵もなし」。「茶酒論」では、茶の売買でたちまち大金持ちになる、というくだりがあるが、「酒茶論」には見られない発想である。このように上戸の主張は酒の楽しさに集中し、下戸に対する嫌味はせいぜい共に語るに足りないというようなもので、わずかに数行に過ぎない。最後に上戸は、「南無阿弥陀仏」と唱えれば破戒であっても救われるとして、「長持か、新酒も古酒も酔ひぬれば、念仏宗をぞ深く頼める」の歌を詠んで終わる。浄土宗を開いた法然上人の教えは、ひたすら「南無阿弥陀仏」を唱えることにより、貴賤・男女の別無く極楽往生できるというものである。生ぐさを食べ酒を飲んでも、「不浄」と打ち捨てられず、「不簡破戒」と嫌われることのないゆえに、阿弥陀さまは上戸の頼みの綱なのである。

第三段は下戸の弁である。その主張のほぼ半分が、飲酒による失態や醜態をあげつらうことで占められている。下戸はまず、飲酒は五戒の一つである（「不酤酒戒」＝酒を売ることと飲むことの禁止）として、酒によって身を亡ぼした故事を、中国と本朝から引いて述べている。中国の古典からは項羽と劉邦の「鴻門の会」、殷の紂王の「酒池肉林」の故事、白居易の「琵琶行」のヒロインである<sup>11</sup>。劉邦は宴席を抜け出して命拾いし、紂王は酒のために国を亡ぼした。本朝では源氏物語から、光源氏が須磨に流された話<sup>12</sup>、今昔物語から藤大納言の北の方が大臣に奪われた話<sup>13</sup>を挙げて、酒による失態や悪事を非難する。これを皮切りに、下戸は飲酒の罪を延々と数え上げる。曰く、酒飲みは酒屋に入り浸って酒を飲み、酒代を取り立てれば逆切れする。人に逢えはずねたり管を巻いたり。千鳥足でふらふら歩き、厠に落ちて全身糞まみれになるのは、憎らしさを通り越して汚らしい。酒呑みの赤ら顔がどす黒くなるのはすさまじいものだし、生ぐさい口臭は周りの人間を辟易させる。酔っ払いの醜態はもの笑いの種になるばかりか、他人を害したり自分の命を失うことさえある。さらに、酔いつぶれて正体不明になり、人に介抱されるみっともなさ。翌日は二日酔いで仮病を使う羽目になるのだ、等等。今も昔も、酔っ払いのすることは変わらないようである。この後は四季折々の飯（赤飯、麦飯など）やもち米製品（粟もち、ちまき、亥の子もちなど）まで総動員し、その美しさを褒め称

える。下戸は上戸の挙げる宴会の余興や漆塗りの盃に対して、美しい茶器を並べて「静かに遊ぶ茶の会は、酒盛りよりも面白」いのだと反論する。最後に好飯は「南無妙法蓮華經」のお題目を唱え、「好飯は、五味の調熟ことふりて、なを味ははん法喜禅悦」と結ぶ。法華宗（日蓮宗）の説くところでは、すべての人間は仏性（仏としての本性）を備えており、「南無妙法蓮華經」を唱えれば仏性が顕現されるのである。

第四段は中戸の中左衛門仲成が登場し、万事ほどほどが良いと、「中庸」「中道」を説く。仲成は上戸の酔態、下戸の口の悪さを「すさまじいもの」としながらも、「持戒の中も、自から、酔いさるほとを、許せとて、一盃はじむる、人をこそ、一こう断酒のひじりより、まさりてとうとく、覚えけれ」と、持戒（仏教の戒律を堅く守る）の人であっても、戒律に縛られる禁欲主義者より、一杯傾ける人のほうが勝ると、飲酒を肯定的に捉えている。さらに宴会や遊興の席、四季折々、食事の際に酒は欠かせないものであり、「さればよろつ事はみな、中に過たる事そなき」と「ほどほどの道」を掲げ、以下「中」の効用についてさまざま事例を挙げる。人の貧富も中ほどが良く、年齢も十七歳から十九歳が人生の盛りである（当時は平均寿命が短かったためであろう）。体格も中肉中背、四季における春と秋、季節の天候、すべて中くらいがほどよいと説く。この「中くらい」の列挙の中には、「心つかひ」が挙げられている。「気も過たるも、とりくるし、正体なきも、をこかまし、中なる人のこころこそ、なかき友には、よかりけれ」と、むやみに気を回されるのは嫌味に感じるし、さりとて正体ないほど酔いつぶれるのも見苦しい。ほどほどの心遣いがあるからこそ、長いお付き合いができるのだ、と言う。当時の人々の人間関係が現代と変わらぬことを感じさせる一節である。最後は官職や寺院の堂宇、極楽浄土の等級、果ては阿倍仲丸（仲麻呂）に至るまで、すべてに「中」があるではないか、と主張する。そして、上戸も下戸も「中道」を離れないものであり、悟りも自分を離れてはあり得ない。仏は自分の心の中にあるのだとして「南無三宝」を唱え、「世の中に、すむ仲成か心中に、中道の理を悟りぬるかな」と詠んで終わる。中戸の仲成が天台宗になぞらえられるのは、天台宗が「四宗兼学」（法華經、禪・戒、念仏、密教）などの要素を包含するからであろう。天台宗で行われる「止観行」とは、朝は法華經を中心とし、午後は阿弥陀仏を中心とする行であるという。つまり、浄土宗と法華宗を内包する（上戸と下戸を一体とする）ものなのである。

#### 四、水と中戸の役割

最後に、「茶酒論」「酒茶論」「酒飯論」に登場する、仲裁役の役割について考えてみたい。「酒茶論」における「一閑人」は、さしたる主張も無く、風流合戦に終止符を打つ役目を請け負うのみであった。「茶酒論」や「酒飯論」における水や中戸はこれと違い、その弁舌には、作者の主張が込められているのである。仏教を奉ずる茶（或いは禁欲的な「飯」）は、「戒」（罰則、規則）によって人間の行動を細かく規制する。逆に酒は心（欲望）の赴くままに振舞い、抑止力の無さから周囲を害する事態に陥る。水や中戸は、極端に走る茶（飯）や酒を取り持ち、融合させる使命を担っているのである。ここには、バランスを崩したものを中和・安定さようとする、人間の心理作用が働いているのではないだろうか。その安定のためには自主性から発した「秩序」が必要なのであり、これが中戸の説く「ほどほどの道」や、水の言う茶と酒の融合——「従今已後、切須和同、酒店発富、茶坊不窮。長為兄弟、須得始終。」（二人とも、今後は仲良くしなきゃいけないよ。そうすれば酒家は繁盛、茶店も繁盛。長く兄弟の契りを結び、ずっと変わらぬお付き合いをせなさい。）につながるのである。周囲との和合や礼儀の重視という点において、「茶酒論」と「酒飯論」は共通する部分を持つのではないだろうか。また、教派同士の争いという観点からみれば、作者のねらいは弘法大師空海の『三教指帰』のように、最後に意見を述べる人物を強調し、その主張を正当とすることにある。とすると、「茶酒論」では儒教が、「酒飯論」では天台宗が優位であることを、暗にほのめかしていると言えるだろう。

#### おわりに

「酒飯論」の特徴は、三者三様に自分の意見を述べるという形式、それぞれが仏教の宗派になぞえられていること、そして当時の社会風俗や飲食のようすが詳細に描かれている点であろう。こうした特徴は「酒茶論」のそれと、大きく異なっている。三人による、三者三様の意見の陳述という形式は、空海の『三教指帰』に見ることができる。『三教指帰』では、三人の人物を儒教・道教・仏教になぞらえて、それぞれが自派の教義を説いている。作者空海の主張は最後に登場する人物（仏教）の弁論に象徴されるが、「酒飯論」の形式もこれと類似し、作者の意図は中戸の掲げる「中道」（浄土宗、法華宗を兼ね合わせる）にあると思われる。中国では南北朝から唐代にかけて、儒仏道の三教による論争がしばしば行われ、「茶酒論」の体裁もそれになぞらえたものとされる。日本の室町時代中期、仏教

界では宗派間の対立が表面化し、弾圧や紛争が絶えなかった。例えば天台宗は浄土真宗に対して弾圧を行っている<sup>14</sup>し、天文年間初めには、法華宗が浄土宗寺院を焼き討ちし、その数年後には天台宗が法華宗に大規模な弾圧を行っている<sup>15</sup>。「酒飯論」の成立年代ははっきりしないが、こうした社会情勢を踏まえて創作されたものと考えられる。中戸の仲成が「中道」を称え、何ごとも極端に走らずほどほどが良いと説くのは、擾乱の社会に生きた作者の、人生観であるといえよう。これに対して「酒茶論」には社会的・思想的な背景は見られない。茶と酒の論争は、あくまでも風流韻事を述べるための材料にすぎないのである。

「茶酒論」、「酒茶論」及び「酒飯論」の因果関係については、なお不明な点が多い。しかし、酒と茶（飯）の論争から、当時の人々の人生態度の一端を、うかがい知ることができるのである。

#### 注

- 1 青木正児氏は『抱樽酒話』で日本の「酒茶論」は敦煌の「茶酒論」に何らかのヒントを得たのではないかとしており、福島俊翁氏も「酒茶論」（『茶道古典全集』第二巻収載）の中で両者の関連性について、速断はできないが「その間一脈相通ずる所の深いことは確かであろう」と述べている。これに対して渡辺守邦氏は直接的な影響は無いという見解を示している。（『酒茶論とその周辺』大妻女子大学文学部紀要第八号）
- 2 趙達夫「唐代的一个俳優戯脚本—敦煌石窟发现「茶酒論」考述」（『中国文化』第三期）及び王小盾、潘建国「敦煌論議考」（『中国古籍研究』）
- 3 蘭叔は後に、京都妙心寺第五十三世となり、時の朝廷から紫衣を賜っている。
- 4 安楽庵策伝『醒睡笑』巻之八に、「濃州鏡島にて。乙津寺梅の寺といふ。……この寺の一代に蘭叔和尚とてあり。酒盛の座にて。正雲といふ僧に『一つ飲め』とあり、『禁酒』と答ふ。『何事に。』『飲酒はこれ仏戒なり』と。『して、飯をも断つか。』『飯をいましめの旨ありや。』『なかなか。いひがひ（飯匙）、またはおだいがひ（御台匙）禁戒よ。』和尚は酒茶論の作者なり」とある。「飯匙」「御台匙」はいずれも飯を盛る杓子のこと、それぞれ「飯戒」「御台戒」に掛けたしゃれであるという。（岩波文庫、鈴木棠三校注）
- 5 横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第七巻。
- 6 李白「春夜桃李園に宴する序」、白居易「王十八の山に帰るを送り、仙遊寺に寄題す」。
- 7 曲水の宴では小川に盃を浮べ、重陽の節句では盃に菊の花を浮かべるため。
- 8 「酒飯論」原文には「世継のおきなのことばにも。光さしそふ盃は。もちながらこそ世をばふれ。」とあるが、紫式部の原歌は「めづらしき 光さしそふ 盃は もち

- ながらこそ 千代をめぐらめ」である。
- 9 光源氏の元服の宴会、狭衣の大将と女二宮の感情のすれ違い、在原業平と伊勢の齋宮の悲恋。
  - 10 『晋書』巻68「顧榮伝」に、「惟酒可以忘憂、但無如作病何耳。」、また、白居易「勸酒寄元九」詩にも「何不飲美酒、胡然自悲嗟。俗号銷愁（一作憂）藥、神速無以加。」とある。
  - 11 「琵琶行」のヒロインは「長安娼家の娘」で、琵琶の名手であった。商人と結婚したが夫は留守勝ちで、寂しさを琵琶で慰めるという話である。酒で身を持ち崩した（「酒ゆへ 身をば 捨ててし」）わけではなく、どちらかといえば「茶」の売買をしていた夫に顧みられなかったのではないか。
  - 12 源氏と朧月夜の君（東宮の女御になるはずだった）との恋愛関係の発覚が、源氏須磨流しの一因となった。
  - 13 『今昔物語集』「世俗部」巻第22「時平の大臣、国経の大納言の妻を取りし語」。時平の左大臣が国経大納言の若く美しい奥方を見初め、大納言を酔いつぶして奥方を奪い去ったという話。
  - 14 浄土真宗中興の祖・蓮如は天台宗延暦寺から、三宝誹謗の邪道に堕ちているとして弾圧を受けている。
  - 15 天文元年（1532）法華宗による山科本願寺の焼き討ち。

天文五年（1536）には「天文法華の乱」が起こり、比叡山延暦寺の僧兵により、法華宗寺院が焼き討ちされている。さらに、天正七年（1576）には「安土宗論」（浄土宗と法華宗による宗教討議。織田信長の命による）が行われ、敗北した法華宗は壊滅的な打撃を被っている。

#### 参考文献

- 埴保己一『群書類従（統群書類従完成会 1960年）  
青木正児『抱樽酒話』アテネ文庫6 弘文堂書房 昭和二十三年  
川口久雄「我が国の『酒茶論』と敦煌出土の『茶酒論』」  
金沢文庫研究 第14巻3号、5号 1968年  
福島俊翁「酒茶問答」『茶道古典全集』第2巻 淡交社 1971年  
渡辺守邦「酒茶論とその周辺」大妻女子大学文学部紀要第8号 1976年  
横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』角川書店 1979年

さんぺい はるみ／お茶の水女子大学大学院 博士後期課程1年